

ふおーらむ

第17号

目 次

巻頭特集

第 22 回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式 …… 2

挨拶：山崎久道 氏

表彰講評：水谷長志 氏

受賞者挨拶

矢野陽子 氏

鳥海恵司 氏

林淑姫 氏

文集

山内明子「俳句八句」 …… 13

大村英正「川柳・自由吟（雑吟）」 …… 14

恵光院白「衣料立国の国」 …… 16

小川千代子「図書館の本、ウチの本—コロナ禍籠城、ベストの本を観る」 …… 18

門倉百合子「二つの音楽図書館と私」 …… 22

菊池佑「「感染症と戦争」は人口の調節弁か？—多人数の抹殺の恐ろしさ」 …… 24

古賀節子「アンドリュー・カーネギーについて」 …… 27

平川千宏「わが愛唱歌」 …… 29

水谷長志「コロナ禍の大学で令和二年度の遠隔講義と学会等講演はいかにして遂行されたのか？—極私的覚え書き（途中経過報告）」 …… 31

山崎久道「駅名考—効率性・経済と文化」 …… 34

編集後記

第22回図書館サポートフォーラム賞授賞式

於／2020年9月29日（火）

喜山倶楽部光琳の間（日本教育会館内9階）

国際的な交流活動、もしくはその中における日本の地位を高めることに貢献された方を表彰させていただくというのが、第三のポイントとなっています。

大体この専門性、社会的意義、国際貢献といった三つを柱にして、元代表幹事である末吉哲郎さんのご発案で始められた賞でございます。この未曾有の事態であるコロナ禍の中、多くの図書館の運営活動そのものも危機をきたしています。本会はささやかな組織ではありますが、こういった表彰活動を通して、図書館に従事される方達をサポートしていくことが今後必要だと思っています。

この後、表彰委員長の水谷さんより、表彰選考の経過と表彰理由についてご報告がございました。今回も素晴らしいお三方の表彰者をお迎えすることができましたので、コロナ禍で三密を避けなければならず、いろいろとご不便をおかけしますが、感染予防の範囲でお楽しみいただければ幸いです。

以上をもちまして、表彰式のご挨拶とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

1. 挨拶

山崎久道氏

（図書館サポートフォーラム代表幹事）

本日はコロナ禍の中、図書館サポートフォーラム賞の表彰式会場に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。図書館サポートフォーラムの代表幹事を仰せつかっております山崎久道と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

図書館サポートフォーラム賞も、今回22回目を迎えることとなりました。2、3月というまさしく新型コロナウィルスが国内でも猛威を振るい始めた時期に表彰選考を行い、幹事の方々と議論を重ねた結果「こういう時だからこそ、表彰活動を続けた方がよいのではないか」という結論に至り、表彰発表を行いました。ただ私

も含め高齢者の多い会ですので、例年4月に予定していた表彰式は、感染拡大を避けて延期し、本日の開催に至りました。

さてこの賞のコンセプトは、三点に要約できるかと思えます。毎回話していることで、ご承知の方も多いと思いますが、大事なポイントですので、改めてご説明させていただきます。

1つ目は、図書館において、非常に地道な活動や専門性を発揮されてきた方々や組織の成果を表彰させていただくということが、第一のポイントとなっています。

2つ目は、図書館の活動、あるいは図書館に類似する文書館とかも含めてと思いますが、社会に対して広く訴える、あるいはそういった活動に貢献された方を表彰させていただくというのが、第二のポイントとなっています。

3つ目は、図書館の国際化というものに非常に貢献された、例えば国際支援とか、あるいは

2. 表彰講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポートフォーラムの表彰委員長をしております跡見学園女子大学の水谷と申します。よろしくお願いいたします。

早速ですが、第22回図書館サポートフォーラム賞の表彰結果について、ご報告いたします。審査は3月17日、大森の日外アソシエーツにおいて7名の出席幹事による投票および2名の不在幹事の通信投票、あわせて9名の幹事による投票で行いました。その結果、推薦の個人3件、いずれも図書館サポートフォーラム賞にふさわしいご業績としてお三人様が受賞されることになりました。

本来であれば、受賞理由についてより詳細な講評をお伝えすべき所ですが、今回はコロナ禍により、表彰式開催自体を半年近く遅らせたことに加え、参加者人数も抑えての式となっておりますので、表彰理由の読み上げのみに留めさせていただきます。ご了承ください。

では、今回第22回図書館サポートフォーラム賞の受賞者お三人について、まず矢野陽子様の

表彰理由を読み上げます

○矢野陽子氏 (公益社団法人 全国市有物件災害共済会 防災専門図書館 司書・学芸員)

矢野陽子氏は防災専門図書館の司書・学芸員として、特に母体組織への図書館広報および防災・災害に関する調査機能の発現において、その図書館力を有効に活用し、東日本大震災、度重なる台風、そして新型コロナウィルスなど息つく間もなく押し寄せる災害に対峙するため、専門情報提供サービスを展開してきた。その結果、市民の防災意識の向上に貢献し、利用者数も劇的に増加させている。これらは、専門図書館の使命と進むべき姿をあざやかに示す活動であり、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

次いで、鳥海恵司様の表彰理由を読み上げます。

○鳥海恵司氏 (株トツカータ 取締役)

鳥海恵司氏は、東海大学附属図書館職員時代から現在所属する(株)トツカータに至るまで、一貫して音楽資料のMARCレコード及び書誌・典拠データベースの構築とシステムの標準化に携わってきたことにより、音楽図書館や公共図書館、国立国会図書館などに貢献してきた。ま

た、「音楽資料目録作成マニュアル」(1997年)、「音楽資料用件名標目表」(1998年)、「日本目録規則2018年版 典拠データ完全実例集」(2019年)など音楽資料目録作成の基本的ツールを提供してきた。近年ではRDA (Resource Description & Access) への動きを先取りし、音楽資料目録への適応とその普及のために積極的な活動を行い、図書館界に大きな影響を与えている。こうした半世紀にわたる貢献と功績は、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

最後に、林淑姫様の表彰理由を読み上げます。

○林淑姫 (りんしゅくき) 氏 (近代音楽史研究者／旧日本近代音楽財団日本近代音楽館主任司書)

林淑姫氏は、遠山音楽財団附属図書館、日本近代音楽館、音楽図書館協議会、及び和歌山県立図書館南葵音楽文庫等の活動を通して、明治以降のわが国の音楽資料の収集、調査研究、目録作成に携わり、「山田耕筰作品資料目録」(遠山音楽財団附属図書館)、「日本の音楽コレクション」(音楽図書館協議会)、「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」(国立国会図書館DB)などの編纂・公開の中心的役割を担った。楽譜

出版史・音楽図書館史の観点から研究を進め、明治期以降の洋楽史研究に新たな領域をひらいた。これら一連の活動によってわが国における音楽資料の全体像を明らかにした功績は、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

以上をもちまして、簡単ではございますが、今回の図書館サポートフォーラム賞の表彰者のご紹介とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

3. 受賞者挨拶

矢野陽子氏（防災専門図書館）

このたび、栄えある図書館サポートフォーラム賞をいただきまして、大変光栄に存じます。推薦くださった山崎先生、選考くださった先生方、そしてサポートフォーラムの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

授賞理由が書かれたFAXを初めて受け取ったおり、地道に続けてきた図書館活動に気づいてくださったうえに、評価して頂いたことを知り、胸が熱くなりました。防災専門図書館の活



動そのものが受賞理由ですので、その内容を少しお話できればと存じます。

防災専門図書館の母体組織「全国市有物件災害共済会」の設立は昭和24年です。戦後の復興のなかで、災害にあった市の機能を回復させるためには、その費用を日ごろから準備しておけばよいのではないかと、そういった発案から、地方自治法第263条の2に基づき複数の市が相互に救済しあう共済事業を実施するため、各市が共同して設置した機関です。

当館は、母体組織の事業として調査研究のための収集していた資料が約2、000冊を超えたところ、より良い資料の活用方法を模索しているなかで、有数の災害国であったにも関わらず、当時の日本にはなかった「防災・災害の専門図書館」を開設しよう、という機運が盛り上がり、昭和31年、公開型の図書館として開設しました。以来、60年を超える歴史の中で、絶え間なく資料を収集してこられた先輩方の蓄積によって、今日の防災専門図書館ができています。現在では16万冊の蔵書を抱えており、独自分類で整理された資料群は、レファレンスする際の強固な下支えになっていますし、まさに宝の山そのものだと思います。

例えば、当館では災害を「人に災いを及ぼすもの」ととらえております。それゆえ、自然災害だけでなく、人が起こした災害も含めており

ますので、災害とみなす種類が多いのが特徴です。今、多くの方を苦しめている新型コロナウィルスも「災害」として資料収集の対象となっており、「公害」分類のうちの一つ「公害病・疾病（伝染病）」として分類を付与しています。人が人を傷つける「戦災」の資料も所蔵しています。

もちろん、毎年のように日本を襲い被害を残す台風や、一瞬のうちに人々を恐怖に陥れる地震などの資料も収集しております。例えば、東日本大震災関連では約4、000冊の資料を所蔵しておりますし、熊本地震では約400冊です。また、被災した状況を知るための資料だけではなく、災害を減らすための情報や防災教育などの資料も、広く収集しています。

当館のスタッフは、これらすべてが命を守るための情報だと認識しています。それゆえ、私共は医者ではありませんが、常日頃から「命を守るための情報」を伝えているという自覚と熱意をもって利用者に対応しています。「防災専門図書館に行けば、何か情報が得られるのではないかと？」そう思って来館される利用者の方に、正しい情報を渡さなければ、イザということに、間違った行動をしてしまうことになるでしょう。「防災の常識」も変わっていきますので、情報の更新や、日々の新しい情報の収集も欠かせません。また、蔵書を利用した企画展を開催

して、命を守る情報を集められる場所と資料があることを広く広報してきました。これら熱意が伝わってきたのか、利用者数は平成25年と比べると約6倍に増えています。

さらに、活動を維持していくためにも、母体組織の方との繋がりもできるだけ持つようにしてきました。当館は他部署とフロアが異なっており、日ごろ行き来は多くありません。しかし、常に広報し、また相談することで関係を継続させ、たとえ求められていなくても、関連しそうな資料を積極的に提供することで、他部署の方が情報を探している時に、「そういえば図書館なら何かあるかも?」と連絡してもらえる関係を築いています。

今年度は、他部署が企画した防災のオンラインイベントに、当館の紹介動画を流すという企画が出され、協力して動画を制作することができました。この動画はNDLのカレントアウェアネスにも紹介され、他館からも制作方法の問い合わせがくるなど、思いがけない広がりを見せています。今後は、図書館総合展や内閣府が主催する「オンラインぼうさいこくたい」でも流す予定です。

また、平成24年度に外部有識者を招いて「防災専門図書館に関するあり方検討委員会」を開催し、28年度にはその「フォローアップ会議」を開催しました。これにより、外部からの公正

な意見をもとに図書館としての方針を組み立て、その方策を母体組織へ積極的に訴えかけられる環境もつくられました。この方針は、図書館の中期計画の柱になっており、今後の図書館運営の土台にもなっていくでしょう。

図書館の業界は、さまざまに厳しい局面にあると思います。当館も、日々の業務に追われ、事業の継承やあり方などの問題を抱えています。難しい時代になっているとは思いますが、この度いただきました賞を大いなる励みとして、これからも市民の防災意識の向上に寄与してまいりたいと存じます。誠にありがとうございます。

鳥海恵司氏

(株)トックカータ

この度「図書館サポートフォーラム賞」をいただいたことに、厚くお礼を申し上げます。そして、これまで共に歩んできた仲間に感謝したいと思います。

私の受賞理由は音楽資料を中心とした書誌・典拠データベースの構築と標準化に携わってきたことと理解していますが、数十万件に及ぶ大規模なデータベースの維持管理など個人の力だけで実現できるものではありません。

私の本業は、いわゆるカタログという職種



ですが、言わば裏方の仕事です。私は図書館職員を大昔に卒業しましたが、カタログガラの多くは、図書館のバックヤードで毎日・毎日、モノと対峙してメタデータと呼ばれるものを生産しています。図書館全体としてはサービス業、接客業と考えていますが、その意味ではカタログという人々はやや異質な存在であります。時には偏屈な人が多い仕事と思われたり、また、その仕事ぶりが職人の世界のような、と言われることもあります。

私がいわゆる目録と呼ばれる世界に足を踏み入れたのは、図書館職員になって5年目、視聴覚資料係という小さな部署を任された時で、AACR2が現れる1年前のことです。語学のカセットテープ中心の資料数1,000点、という小規模なコレクションを学生に提供する部署でしたが、目録は未整備で、その構築も重要な使命の1つでした。ただ、当時の目録規則AACR1では、メディア系の扱いは僅かで、とても実用に耐えられるものではありませんでした。

その後、AACR2が出版され、最初の輸入ロットのうちの1冊を入手することができ、ここから目録規則との長い付き合いが始まりました。

始めに行ったのは規則本文の翻訳です。とは言っても視聴覚資料の目録作業で最低限必要

な、記述総則と録音物の2つの章だけですが。

この同じ年、芸術系の分館に音楽録音物の購入予算が付き、年間1,500件程の目録作成も担うようになりました。音楽資料の目録作業では作品の題名までコントロールする必要がある、これにはタイトルの本体とそれ以外の要素を区別する、とか、個有名のタイトルと音楽形式やジャンル名と同じタイトルとの二重基準、番号や演奏手段の形の統一や順序、などなど、決め事が多く随分鍛えられました。必要に迫られてアメリカの議会図書館や音楽図書館協会が発行する目録関係の雑誌にも目を通すようになり、標目や統一タイトル、現在は典拠形アクセスポイントと言いますが、これらの変更の多さに驚いたり、適用細則のうち仕事に必要な部分を翻訳しているうちに、必要な道具は自分で作る、という、まるで職人の世界のようなことになっていきます。

その後、大手取次の図書館センターの所長さんから声が掛かり、私の図書館職員時代は終わり、現在の職業に転職するわけですが、当時は目録カードからMARCと呼ばれる電子データに移行が始まったばかりで、最初は目録カードを印刷するシステムを設計する必要に迫られ、MARCデータの入れ物、これをフォーマットと言いますが、その入れ物も設計しました。この時、ISO 2709…磁気テープによる書誌情報交

換用フォーマットという国際規格を、これも必要に迫られて翻訳しました。このお陰で、出来上がった国際標準に則ったフォーマットは大きな変更をすることなく、Toccatのクラウド・システムで現在でも使われ続けています。

1980年代の後半は、コンピュータが急速に進化して、小さな体育館ほどのスペースが必要なメインフレームと呼ばれた大型コンピュータ・システムでなければ処理できなかったことが、小さなコンピュータでも実現できるようになっていきます。当然のように外部にアウトソーシングしていた処理を、コストカットのために社内処理することになり、目録環境と製品出力の基本設計を、他に人がいなかったため引き受けることになり、2,000ページほどの仕様書を書きました。このシステムは1990年からハードウェアの交換がでなくなつた2010年代初めまで動いていました。この間、国立音楽大学図書館の初代の図書館システムLSIの基本設計にも携わりました。現在Toccatで運用しているクラウド上の目録システムと検索・ダウンロード・システムは第三世代と呼ぶことができます。

このように、本業の目録作業を行うための基盤整備から、入力マニュアル、演奏手段のリスト、件名目録やジャンル・形式用語のマニュアル、と言つた細々とした文書を作つて来ました。

このうちの幾つかは出版にも繋がりました。これらは国立国会図書館のNDL Onlineで検索することが出来ます。

今回の受賞は、このような図書館サポート的な活動が評価されたのかも知れない：と密かに思つております。これを第22回図書館サポートフォーラム表彰式でのご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

林淑姫氏

(近代洋楽史研究者)

此度名誉ある図書館サポートフォーラム賞を賜りましたこと、まことに光栄に存じます。

賞というものは、過去に団体としていただいたことはあるのですが、個人としては初めてのこと思いますが、発表を聞きつけた方々から次々にお祝いのご挨拶が届けられて、当人も段々と受賞の重さとお喜びを実感するようになりました。ありがとうございます。

此度の授賞は40年の長きにわたって音楽図書



館の仕事に携わって参りましたことに対するねぎらい、ご苦労様賞であるうかと思えます。長いことは長いのですが、顧みてどれほどのことをなしたのかと考えますと内心忸怩たる思いがあります。

振り返ってみれば仕事はわたくしが積極的に選んだというより、いくつかの出会いがあり、その出会いが広げる地平を無我夢中で歩いてきたように思います。

わたくしが音楽図書館の仕事に携わるきっかけを作ってくださったのは、図書館短期大学別科でご指導いただきました馬場重徳先生で、日本のミュージック・ライブラリーは資料の整理法も含めてこれからの分野で、やり甲斐のある仕事だからと音楽図書館への就職を強く勧めてくださいました。最初の勤務先である国立音楽大学附属図書館では松下鈞さんから音楽図書館のイロハを教わりました。入職したばかりのひよこを相手に、これからの音楽図書館のイメージを熱く語られたことを思い起こします。その後音楽評論家の遠山一行先生が運営されていた遠山音楽財団附属図書館でお世話になり、以降創設されることになった日本近代音楽館の仕事に従事しました。従来日本の音楽研究は西洋音楽、あるいは日本伝統音楽を主たる対象としており、明治以降の日本近代の音楽については必ずしも重視されていませんでした。遠山先生は

日本近代ならびに同時代の音楽家たちの遺産を正しく評価するためには、関係する資(史)料の蒐集保存を専門とする機関が必須であることを主張されて日本近代音楽館を創設されました。1987年秋のことです。設立にあたって遠山館長のお供をしてあちらこちらに見学や調査に通いましたが、とりわけ当時日本近代文学館の理事長でいらつした小田切進先生に懇切なご指導をいただきました。比較にもならない小さな規模ではありますが、近代音楽館は日本近代文学館をお手本にして設立されました。設立前後に、音楽資料整理の先達小川昂先生に親しくご指導いただいたこともわたくしの財産です。

先人に教えていただいたことがらとともに、資料との付き合いを通して多くのことを学んだように思います。ひとことでいえば、資料が語っていることを読み取るための姿勢です。情緒的なものいいになりますが、半端な知識や思い込みで接すると資(史)料は沈黙してなにも語らない。よく理解するためにはなによりも対象とする資料に辞を低くして謙虚に向き合うこと、理解するための知識を磨くことであったように思います。その支えとなるものは改めて口にするに気恥ずかしくなりますが、資料や作品に対する愛だと思っております。図書館、資料館は基本的にサービスマンです。時間軸を縦に、空間軸を

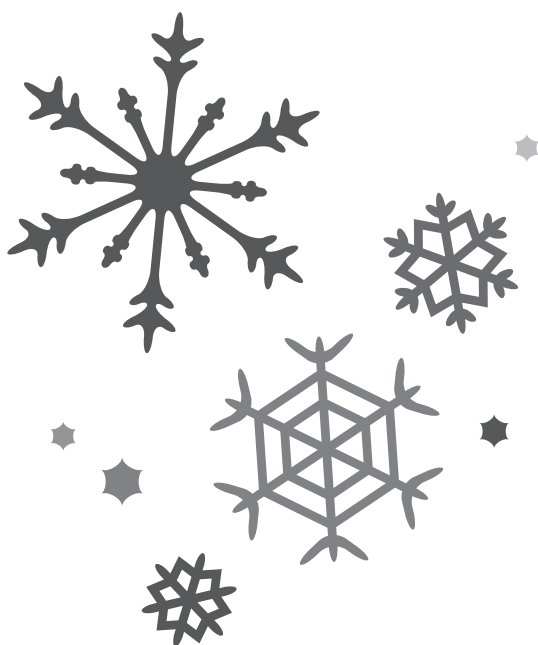
横にとるとわたくしたちはその交点にあり、過去と現在の資料をよい形で次代に渡すこと、資料と利用者をよく結ぶことのために仕事をしています。館内の職種にかかわりなく全体としてそのようなものとしてあります。個人的な嗜好や行動をその場に直に持込むことは多分できません。

2010年に近代音楽館が財団法人の手を離れ、明治学院大学に移管されたことを機に退職し、個人的な課題としてきたものをまとめたこともありしたので、現場を離れたところで仕事をすることを立てました。既に取りかかっておりました国立国会図書館「近代日本刊行楽譜データベース 洋楽編」(2015年公開)、音楽図書館協議会40年史「日本の音楽図書館」(2019年刊行)などが終わればそうなる筈と思っておりましたが、どれも予想以上の時間がかかりました上に、新たなことがらも起こってなかなか思うように参らず、現在、和歌山県に移されました「南葵音楽文庫」――大正期に徳川頼貞によって設立された「南葵音楽図書館」を礎としてありますが――のお手伝いをしております。南葵音楽図書館は徳川頼貞の父頼倫が創設した私立図書館「南葵文庫」を前身としています。南葵文庫は大橋図書館とともに草創期の図書館運動を強力に支えた民間の図書館です。かかわってみれば新しい発見にわくわくするこ

ともあります。地平線を追いかけて歩く道はまだ続いているようなのです。音楽を軸にして広がる近代日本の文化と芸術の領域は広く、未開拓のまま残されていることがらはあまりにも多いということでしょうか。というわけでもう暫く現場近くで仕事を続けることになりそうです。

先人に教えていただいたことはまことに多く、そのほとんどの方が鬼籍に入られた今、何かしらのお手伝いを致しますことは御恩返しにもなろうかと思っております。簡潔にと思っておりますのに長広舌になりました。此度の授賞に重ねて感謝の意を表し、ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございます。





俳句八句

山内 明子

白魚と三つ葉かき揚げ猪口備前

秋茄子漬かる午後の六時に待ってます

伏見の酒に酔ふぞ秋の蚊わが血吸ひ

焼き牡蠣食い放題バケツもて補充

開高健并めす蟹十匹分の身

第九歌ふ歌詞のすべてにカナふって

別れちまいな爛酒コップに替へるぞ

金貸せと貸せば爛酒つき合へと

川柳・自由吟（雑吟）

- 一、天災というが半分ほど人災
- 二、動物にある愛護法子にも欲し

この二句は第十四回全国時事川柳大賞 誌上
大会（二〇一九年の出来事）秀逸入選作。

- 三、海よりも溝を埋めたい国と県
- 四、そこかしこ春限定の美男美女
- 五、日曜日妻につけたGPS
- 六、新人の本音引き出す縄のれん
- 七、付けたいな自動ブレーキ諸大臣
- 八、離さぬ古希の憲法古希の妻
- 九、もう六人侍欲しい文科省
- 十、有ったこと無かったことにする多数
- 十一、勝てる日を決めてゆっくり出す大義
- 十二、大義なく争点多いこの選挙
- 十三、総理殿何を質問しましょうか
- 十四、半世紀オールドばかりニュータウン
- 十五、予算委は予算を審議しない会

大村 英正

- 十六、スケートを習わされそう秋田犬
 - 十七、ふるさとは返礼ありて思うもの
 - 十八、米国製乗る気がしない横車
 - 十九、側近は記憶の沙汰もボス次第
 - 二十、善しあしも嘘も真も頭数
 - 二十一、異音など気にせぬ政権新幹線
 - 二十二、産めぬ国作っておいて産めと言う
- この二十句は二〇一七年二月から二〇一八年七月、朝日新聞「千葉笑い」欄に掲載された拙句である。

- 二十三、天安門テレビの故障多くなり
- 二十四、葬儀費が貯まらず夫婦死ねません
- 二十五、ヨタヨタと歩く白寿の口達者
- 二十六、美食妻大金かけてダイエット
- 二十七、愛してる古女房は呆れてる
- 二十八、妻だけだメールの相手新スマホ
- 二十九、禁煙をしても娘に煙たがれ

- 三十、歳重ね丸くなる人刺の人
- 三十一、Eメール一日一回今帰る
- 三十二、他人の歌聴いて持ち歌思いだす
- 三十三、キレル奴昔秀才今不良
- 三十四、バリアフリー夫婦の段差直せない
- 三十五、課長より我社に詳しい転職者
- 三十六、盛る土で嘘を隠した新市場
- 三十七、災害は忘れる前にやって来た
- 三十八、やりたいが三年もつ石が無い
- 三十九、セクハラと騒いでみたの淋しいの
- 四十、いやな人声を聞いても嫌な人
- 四十一、社ではオイ家じゃハイハイ部長さん
- 四十二、父夜勤娘蒸発妻揮発
- 四十三、嵐とはどの台風と聞くおやじ
- 四十四、親離れ子離れ夫離れない
- 四十五、予算案こう使うよと他人の金
- 四十六、道徳を説く者に要る人の道
- 四十七、前向きに善処検討熟慮中
- 四十八、オスブレイ忘れる前に墜ちてくる
- 四十九、生き残る力知恵出ぬ老もんじゅ
- 五十、どこまでも線路は続かない地方
- 五十一、年金を減らした人が言う福祉
- 五十二、窓際の手柄話に無い証拠
- 五十三、パスワードパソコンに張る部長さん
- 五十四、新原則原則葬り無原則
- 五十五、お子様がどちらにも似ぬ不思議な世
- 五十六、不倫劇観てる妻見て覚める酔い

五十七、下車までに右眉までは描けた顔
 五十八、もう年だ未だ若いとの使い分け
 五十九、いつ出来る千円亭主ワンコイン
 六十、死刑囚釈放されてさんとなる
 六十一、少子化で萎む学力競争心
 六十二、マスクして歌も出ぬ世の花見酒
 六十三、自己流が独創性と知る科学
 六十四、残業と言いつてもきぬ縄のれん
 六十五、子供の日いつまであるのこの日本
 六十六、自己責任換言すれば見捨てます
 六十七、自分史の妻に見せたくない頁
 六十八、ハラハラドキドキ懐かし稀勢と真央
 六十九、付度に損得思うこの浮世
 七十、最終的不可逆的な喜寿の妻
 七十一、一分九分吹雪葉桜花見酒
 七十二、自分史の主役妻ボチ僕端役
 七十三、桜なら置かれた場所であいたのに
 七十四、本震も本心も直ぐ分らない
 七十五、川柳は古びた脳のチョコレート
 七十六、いさかいはいつでも亭主オウンゴール
 七十七、初キス日持ち出す妻の記憶力
 七十八、解釈をしてはいけない基本法
 七十九、人生にあれば良いのに途中下車
 八十、永田町地裁を軽く見る輩
 八十一、入院中逃れた妻の気配から
 八十二、残業減娯楽が減って子供増え
 八十三、疲れてる昔過労で今加齢

八十四、何事も面白がって長続き
 八十五、世界中どんな主義にもある格差
 八十六、ハンドルとペダル間違え金婚式
 八十七、幕の内ホームで売ってるフルコース
 八十八、噴火して領土を増やす島と妻
 八十九、車より自動運転したい妻
 九十、顔認証暑い化粧と知恵比べ
 九十一、ノーベルが後悔してる平和賞
 九十二、喉元を忘れたふりの再稼働

この七十句は二〇一六年十月から二〇一七年十二月東葛川柳会機関誌「ぬかる道」の「とうかつメッセ」に入選作として掲載された拙句である。

衣料立国の国

恵光院白

その頃、時期ははっきりは覚えていない。

八〇年代の後半であつたろう。夏の昼過ぎ、堪らない程の暑さと湿気の日だった。都内地下鉄・銀座線へ赤坂見附駅で電車に乗り込むと、顔のやや黒く、スーツ、ネクタイで決めた精悍な風貌の外国人紳士？を、東京の街々を案内している趣きの通訳の人らしい二人連れが乗ってきた。鞆など手荷物は何も持つてはいなかったとおもう。程なく小生は通訳の人を挟んで座席で隣り合わせになった。フランス語を話していたので小生気軽に何処の国の人かを尋ねた。パリダカ（《パリーダカール・砂漠ラリー》が最盛期だった頃か）で有名なヘセネガルの人（外交官？）だと紹介された。小生は通訳の人を介して質問：「どんな産業が盛んですか？、特産物は何ですか？」と尋ねた。「特産はピーナッツで有名だ」という答え。続けて小生の質問：「ピーナッツの生産・輸出でお国は経済・産業・生活など、やってゆけるものなんですか？」と

質問した。俄にその外交官から「アフリカのどの国だって、自国の生産品だけでやっては行けない、殆どの国が先進国からの多大な援助を受けてやっているんだ？」と、「通訳の人を通して」謂わば怒気を含んだ答えが返ってきた。小生は一瞬息を呑み、即後に全てを悟った。小生は深く頷ぎ、それ以上質問を控え、挨拶してのち直ぐに次の虎ノ門駅か新橋駅で降りた（当時、地下鉄には八溜池山王駅は未だ無い）。

思えばその外交官らしき人ヘセネガル国から見たら地球の果て、アジアの東端の遠い、遠い日本にやって来ての最重要な課題は、ODA援助を日本から引き出すことゝが当面の職務である筈、仮に何年か後に首尾良くいつて援助を受けて後、それへの答礼としての自国の大統領（元首？）と日本の首脳との会見、天皇との宴席を算段する事になるはずであつたろう。発展途上国の悲哀を背負つての外交官「？」で

あつても、それでも気を張つて外交の実を挙げねばならない、謂わばその国のエリート階級／階層の職責であつたろう。我ながら口にしてはならないその国の弱点を突いた事になつてしまったのであろうか。彼が着任した前後に、日本の外務省の官僚からの無礼な言葉は受けなかったであらうか。彼の気色ばんだ言葉は、涙を堪えて故国の実情を日本の一介の市井人に吐露した、と捉えるべきなのであろう。

かく言う日本もただか一〇〇年前は全く同じような状態だった筈（日露戦争時前後、財政破綻の只中であつて、米国や英国からの大借金／外債）。戦後の復興期にも（新幹線）。その後はアフリカ諸国に対しては、中国（対エチオピアなど）とは援助競争、湯水の如き援助で八国連・安保理の理事国への為の票の取り纏め／裏金化をしているらしい？。……閑話休題。

ずっと後年、二〇二〇年に分かつた話だが、幸いな事に、二一世紀に入り、ヘセネガル国はフランス（・パリ？）向けの様々で膨大なアパレル／衣料の一大生産地に大変貌していた。ヨーロッパ、ハ華の都パリへの郊外に住んだ[La] Couturiereたち、隆盛を誇つたハ印象派絵画の中の奥様達・お嬢様たちの衣装類の縫製を一手に支えて、パリの下町で働いたお針

子〴〵さん達の、世代を隔てた後輩諸嬢たちは、二一世紀の今では、アフリカのヘセネガル〳〵国などで日々電動ミシンに向かっている事になろう。ランウェイで新ファッション類／《コレクシヨン》を張るデシナトゥール／デザイナ―も出現しているという。令名轟いたあの《パリダカ・ラリー》は既に別の国を走っている。筆者が外国の外交官と話したのは生涯、これ一回に過ぎない。小生としても何やら面映ゆく、苦い思い出となっている。

図書館の本、ウチの本、コロナ禍籠城、ペストの本を観る

●図書館の本を借りる

二〇二〇年はコロナ感染防止のため、四月からずっと在宅の日々が続いた。カミュ『ペスト』を読んでみようかと近隣図書館の蔵書を検索した。お目当ての本、カミュ『ペスト』はすぐに探し当てたが、借りたい人が私の前になんと三十人待ちという表示が出てきた。そこでカミュ『ペスト』はあきらめ、別の本を探すことにして、「ペスト、文学作品」と検索。その結果、欧州を繰り返し襲ったペスト禍を題材にした作品をいくつか見つけ、予約した。しばらくしたら、図書館から「ご希望の本が準備できましたから、×月×日までに市民図書室迄おいでください」というメールが届いた。

LSFの諸兄諸姉には自明であろうが、公共図書館の貸し出しシステムは利用者にとってもやさしく、便利である。わが町の場合、市立図書館の蔵書はインターネットで貸し出し予約ができる。その上、予約した本は数日中にウチの近

小川 千代子（国際資料研究所）

所の公民館併設の図書室に配送され、そこで借りだすことができる。このサービスは無精者の私にはとてもありがたい。

コロナで公共施設が休館となる直前の4月に、私はこうして図書館の本を借りた。まもなく図書館はコロナで休館してしまった。そのため普段なら二週間の貸出期間が、大幅に伸びた。借りた本は図書館休館中は返却しなくてよいことになり、その結果約一か月半の貸出期間ということになった。このゆとりは、コロナ休みの恩恵であった。

実は近隣の大学図書館の蔵書も、地元図書館を通じて借りることができる。今回、このシステムを使って大学図書館の蔵書も借りようとしたのだが、大学図書館は早々にコロナ閉館となっていたため、結局実現せずに終わった。

●『世界の文学14 ケラー・シュティフター』

さて、図書館から借りた本のうちの一冊は、中央公論社『世界の文学14』（※注1）だった。

所収のシュティフター「石さまさま」第一作の「みかげ石」は、かつて学生のころに読んだ作品。作品の名前にはかすかな記憶があったとはいえ、内容はすっかり忘れていた。それでも、若い時に丁寧に読んだ作品だけに、改めて読み進むうちに、その文章の一つ一つが懐かしく親しみ深く感じられた。だが、その親しみ深い文章を記憶と共にたどるうち、どうも何かが違うと思い始めた。なにがそんなに違うのだろうか。その違和感は、版面のせまさ、だった。どうやら本の版面を取り囲む余白の部分が私の記憶に比べ「せまい」のがその原因らしいと気が付いた。

昔、司書の勉強をしたときに、図書館では製本が傷んだら再製本を行う、ということを知ったことを思い出し、手に取った『世界の文学14』の表紙を改めて眺めた。昔読んだあの本と同じ、深紅のクロス装丁だ。裏表紙ウラには図書貸し出しカードのポケットと貸し出しカードも健在。かなり良く借りられていた本であることは、このカードからも推測できた。とすると、よく使われた本だろうし、そうなる本が傷んだために再製本が行われた可能性はありそう。

●同じ本、古書で購入

余白が狭い本を手には、あれこれ思いめぐらすうち、同じ本を古書店から購入してみようと考え

え付いた。こうなると、やはりアマゾン、同じ本はすぐに見つかった。新本ではなく、古書である。数日後に届いた『世界の文学14』は、箱こそ日焼けしていたものの、本体はビニールカバーがかかっており、月報もしおりも挟みこまれ、まさに新品同様の状態だった。頁を開くとぱりぱりと音がした。その時は図書館で借りた本はまだ返却前だったので、並べて写真を撮った。

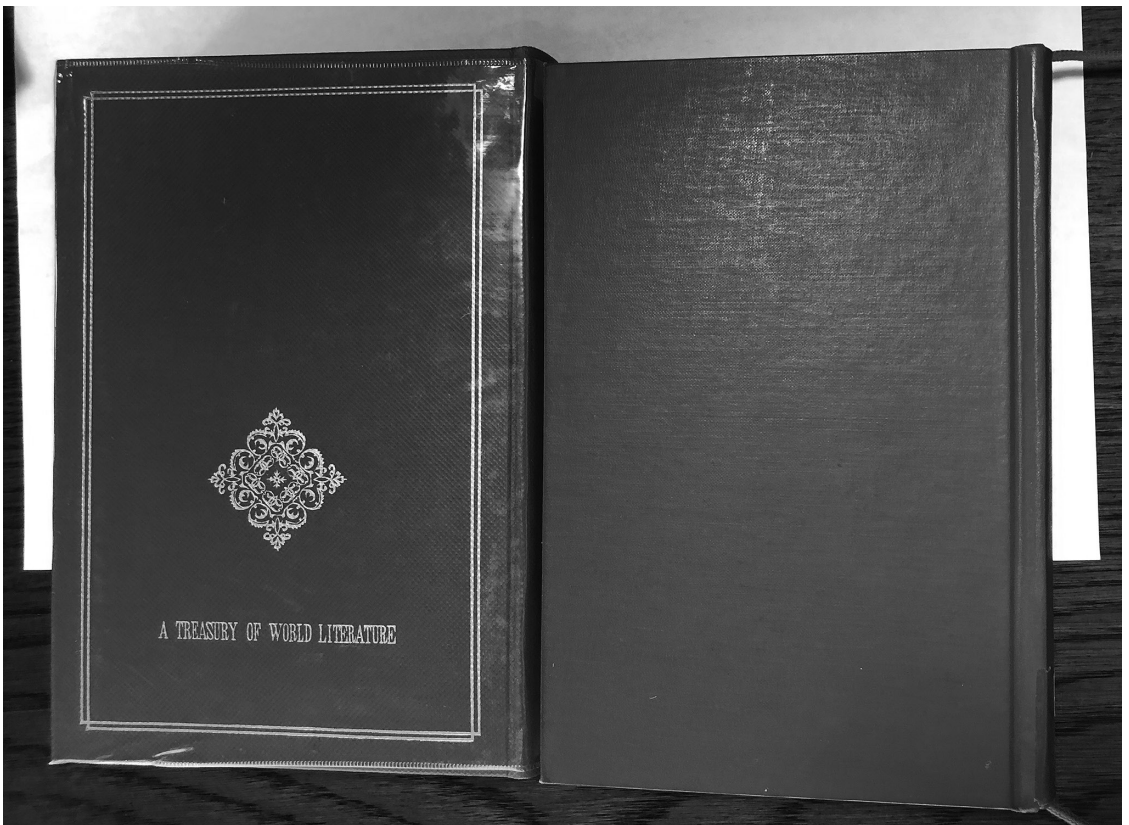
●本を比較する

私の手元にあった2冊の『世界の文学14』、その外観を比較したのが、下の写真。改めて2冊の本を並べてみたら一目瞭然、図書館の蔵書は古書店から届いたものとは装丁が異なる。

これで行く図書館の蔵書のほうは、再製本が施されたと確認できた。表紙に金色ふち飾りが印刷されているオリジナルに対し、図書館のものは表紙には印字も飾りも印刷されておらず、のっぺらぼうだ。よく見ると、わずかにサイズが違う。すなわち、図書館の本は再製本に際して汚れや傷みを除くため、周辺をわずかに切り落とす処理が施されていたことが、2冊を比べてはつきりと確認できた。この切り落とし処理を「化粧断ち」という。これは公文書館在職当時、修復室の技術担当者から教わった。

●再製本と化粧断ちの功罪

この顛末を、北欧で製本技術を学んだ友人に



話したら、「本は、内容だけでなく、その形状もまた、作品と呼応していなければ品格を保つことができない」と、びっくりするほど熱っぽい言葉が返ってきた。そして、私も再製本化粧断ちの結果、版面余白が狭くなってなんとも読みにくかった今回の経験を踏まえ、これに強く同感した。本という「もの」は情報媒体である。だが、そこに盛り込まれる情報は、本の内容情報にとどまらない。その形状もまた、情報源であり、内容情報を支える役割を負っている。

他方、図書館蔵書のように使用頻度が高い場合は、再製本、化粧断ちといった処理を施しつつ、利用者のニーズにこたえる必要がある。となれば本の品格よりは利用優先だろう。

●結び 「みかげ石」の中のペスト

なお、「みかげ石」は幼い男の子がお祖父さんと森を歩きながら、お祖父さんがそのまたお祖父さんから聞かされたペスト流行のころの昔話を聞く、という内容。このテーマがあつて、ペストの文学作品という検索にヒットして、私は五十年ぶりに作家、シュティフターと再会できた。読者諸兄諸姉には、ここまで来てようやくコロナ禍での読書という本コラムの趣旨をご覧いただけるかと思う。

「みかげ石」の舞台は十九世紀初頭と思われる。文中の幼い男の子は、作者自身が投影されているようだ。お祖父さんと男の子が森の小道

から開けた場所で周辺の山々を見渡し、その名前を確かめ合うシーンは、淡々と語るさまが、地図を見るようすがすがしい。

文中のお祖父さんは語る。自分のお祖父さんの時代にペストがはやり、これを避けようと山に逃げ込んだ一家が、結局はペストで小さな男の子一人を残し全滅した。一人残った男の子は一人山をさまよひ、かわいい女の子に出会い、山を下りる。そのころすでにペストも収まり、ペストが収まった時の合図ののろしが上がった。しかし、山の中に逃れた人々の中にそののろしの意味を理解できる人は、もはやいなかった。男の子は成人して、女の子と結ばれ幸せに暮らしたとか。なお、巻末掲載の年譜は西暦と和暦併記だった。

※注1：昭和四〇（1965）年3月初版発行、三五〇円



二つの音楽図書館と私

門倉 百合子

【その一 桐朋学園大学附属図書館】

1980年代半ばから90年代にかけてやってきた仕事の一つに、桐朋学園大学附属図書館の目録作業がありました。桐朋学園はご存知の通り、小澤征爾や中村紘子といった日本の楽壇を背負って立つ人材を輩出している学校です。図書館には、図書や雑誌だけでなく楽譜やLPレコード、CD、映像資料などの音楽資料が多々あります。その中で私が主にやっていたのは、楽譜の目録作業でした。

楽譜の目録作業が普通の図書と大きく違うのは、注記やアクセスポイントをいろいろつける必要がある、という点です。図書なら『坊ちゃん』とあれば夏目漱石の小説ですが、楽譜に『夜の歌』と書かれていても、シューベルトの歌曲かシューマンの歌曲か、エルガーのヴァイオリンとピアノの曲か、はたまたマラーあるいはシマノフスキの交響曲か、タイトルだけでは判断できません。歌なのか器楽か、楽器は何か、ソ

ロか室内楽か管弦楽か、作詞者は誰か、などひとつひとつ確かめる必要があります。担当していたのは日本語以外の楽譜でしたので、資料に書かれているそれぞれの言語で書誌事項とアクセスポイントを確実に採録していくのが求められました。

私は学生時代から始めたオーケストラですつとヴィオラを弾いており、内外の管弦楽作品を数多く演奏してきましたので、音楽関係の様々な言葉や体系を自然に身に付けていました。また学校で習った英語とドイツ語の他、フランス語とロシア語はラジオやテレビ講座で独習していました。図書館学校の恩師が「語学は図書館員の武器です」とおっしゃっていたのを実践したわけですね。おかげでラテン系の言葉はフランス語から類推し、北欧系の言葉はドイツ語と英語から類推し、各国の楽譜の目録を採ることができました。ある時からNACCS・IS・CATへのデータ登録が始まり、何千件もの楽譜の書

誌データをアップロードしました。作曲者の典拠データにリンクを張る、という作業もたくさん行いました。図書館システムの知識と経験に加え、音楽という主題と語学の知識を駆使した仕事は、実に充実した時間でした。

【その二 日本近代音楽館】

私が25年間所属していたアマチュアオーケストラ新交響楽団は、年に4回あるコンサートのうち1回は日本人の作品をとりあげ、芥川也寸志の指揮で「日本の交響作品展」シリーズを続けていました。明治以降日本人が作曲した管弦楽作品は、1981年にNHK交響楽団が作つたリストでは1,500曲以上があげられます。これらの楽譜は作曲者やその遺族が持っている場合と、初演した演奏団体が持っている場合がありますが、必ずしも永続的でなく、何らかのルートで各地の音楽図書館に所蔵される場合もあり、残念ながら散逸してしまうものもあります。1987年に発足した日本近代音楽館は、前身の遠山音楽財団の時代から日本人の作曲した作品を収集していましたので、新交響楽団はしばしば近代音楽館にある楽譜を使わせていただきました。芥川也寸志、伊福部昭、早坂文雄といった作曲家の作品を数多く演奏できたのは、ひとえに近代音楽館のおかげです。

2002年に現在の芥川也寸志メモリアル

「感染症と戦争」は人口の調節弁か？.. 多人数の抹殺の恐ろしさ

菊池 佑

今、人類は新型コロナウイルス感染の地球規模の拡大で苦しみ恐怖におののいています。100年前のウィルス感染拡大（通称スペイン風邪）で多数の感染者と死者を出した過去に比べて人類は精神的に進歩しているのでしょうか？

さらに、日本国内や中国などで記録的な大雨で水害が発生し家屋だけでなく尊い生命も失われ心が痛むことが地球上で続いております。

これらに対して残念ながら未だ「特効薬」どころか「少し効く薬」もありません。

両者に共通していることは、未経験や文献データに見当たらない事態が生じると人類は戸惑い右往左往することです。そして責任のなすりあいがあります。悲しいことです。今こそAI登場と行きたいところですが、科学技術はまだそこまで行っていないようです。世界一速く計算できるスーパーコンピュータでも問題解決の答えは出せない状態です。

専門家と政治家が真剣に話し合っても、経済・景気との絡みで明確な対抗策を打ち出せず、「高い意識で注視しているところだ」とか「分析してメリハリのある対処法を考えます」の抽象的な答弁しかできない政府に苛立ちを覚える国民は少なくありません。

それでは、責めて攻撃すればコロナ問題は解決するのでしょうか？ 解決しないから国民は困っているのです。

これまで経験したことがないことには誰でもどうしたらよいかわからないのが当たり前です。でも、周囲は不安と恐怖心と苛立ちから攻めまくりますが、事態は一向に好転しません。

それはなぜでしょうか？ 全知全能の神に比べると人間は不完全な存在だからです。たとえば移動手段として人類は自動車を発明して行動範囲を大幅に拡大しました。しかし、その一方では交通事故で尊い生命が犠牲になるという事態が発生しています。道路・標識・信号機の改

善や交通安全教育そして法律を作るなどして事故対策に努力をしても、未だに世界では毎日おびただしい数の事故が発生しております。それでも自動車の使用をやめないのは、便利だけでなく「生活必需品」（人や物品の移送、ケガや病気の人の搬送、観光など）と化して日常生活に完全に定着してしまい、後戻りはできなくなってしまうからです。

また人類は快適と便利さを追求して豊かな社会を実現して喜びも束の間、地球温暖化という事態を招きました。「こんなはずではなかった」の繰り返し、呪縛から人類は逃れられない運命にあるようです。

「超過密」の生活様式を改める時の到来

車、電車、バス、飛行機など交通手段の高度の発達で地球上のどんな遠隔地にも1〜3日で到達する現代です。便利さと快適さを求めて人々は都市部に集中し、住居だけでなく職場も効率と便利さで都市部に多く集まるため超満員電車での通勤通学や道路上は車の渋滞が長年続いています。

イベント会場も可能な限り多くの集客で収益を目指すため超過密が続いてきました。大相撲の国技館では平日の大入り満員に関係者は恵比須顔でした。野球場の収容人数5万人、サッカー競技場は10万人などが多ければ多いほど良い

という価値観が世界を席卷してきました。

観光業での増収を求めて誘致に積極投資した結果、日本を含む主要国では内外から観光客が大挙して押し寄せ、かつてないほど地球上のあちこちで「超過密」が日常的になりました。このような環境では感染症が瞬く間に世界規模で拡散することは火を見るよりも明らかです。

不思議なことは、感染症専門家で「超過密」は危険と強く主張し続ける人は過去には存在せず、ワクチンや治療薬の開発に熱心な研究者は多数存在しています。またノーベル賞受賞者も世界の有数な研究機関のいずれも、新型コロナウイルス感染症発生と急速な拡大を予想できなかった。

人類が宇宙にロケットを飛ばせるほどの高度の科学技術を持ってしても日常生活での感染症問題は未解決が多いという現状なのです。アンバランスを感じます。

超過密を回避する手段の一つとしてテレワーク・テレ会議・テレ集会の導入が必要になってきました。つまり超密集に頼らなくても経営が成り立つ新しい仕組み創りです。

「無知の知」の再認識の必要性

私たちは多くのことができるようになればなるほど副産物として新たな問題を発生させているというジレンマから未だに逃れられないでい

ます。

「無知の知」を身に着けていれば、何でも知っている人は一人も存在しない。知らないことが圧倒的に多いとの認識のため謙虚な態度を取れるのです。9年前の東日本大震災での福島原発事故で住民に恐怖心を与えただけでなく強制立ち退きを断行しました。この時に原発関係者たちは、事故は「想定外」の出来事、と涼しい顔でいい訳をして不信を買いました。私はこのコメントを聞いて、専門家と言われる人たちは「無知の知」を知らない、だから恥ずかしげもなく不遜な言葉を吐くのだと思いました。

無知の知を心得ている人・団体ならば、「自分たちの力不足で考えがそこまで及ばないために、こういう結果になり国民の皆様にも多大なご迷惑をおかけしたことにしてお詫びを申し上げます、今後このような事故が発生しないよう常に最善を尽くしてまいる所存でございます」と言うでしょう。

人類は科学技術でいろんなことができて、分からないことの方が圧倒的に多いという認識つまり「無知」であることを「知る」＝無知の知をここで再認識する必要があると私は思います。新型コロナウイルス問題を契機に「傲慢・不遜から謙虚へ」の心と態度の変容の必要性が急務です。

戦争の悲惨さ

さて、今年の8月にまた「終戦記念日」が来ました。この日は「戦争は2度と起こしてはならない」と心に強く誓い後世にしっかりと伝える機会となっております。戦争も「無知の知」が乏しくなったことが原因の一つとして起こりえると私は考えています。職場も国も、「どっちが正しい正しくない」と言い争い、あとは力関係で決めるといやり方が世界中で今も繰り返され、恨みを抱かせる結果になっています。これも戦争につながる潜在的要因であると思います。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」

2014年に、地方の学校図書館が教育委員会から『はだしのゲン』を書架から外せとの指示がありました。この本は戦争を繰り返してはならないというメッセージが込められた作品として国民に愛読されました。私は全巻買ひ家族で回し読みしました。

さて、子供たちに読ませてはいけない理由は「不安にさせる」などです。この時、私は諺「喉元過ぎれば熱さを忘れる」が頭をよぎりました。教育委員会の人たちは90代以上ではなく4、50代・孫の年代です。（注：戦争に行った人は今の90代以上の年代、80代は当時小学生か中学生）。戦争は絶対にしてはならない、という先

人の言葉は時間の経過とともに風化する運命にあるようです。

戦争も感染症拡大も大事故も「人災」の部分が否定できません。では、この人災を防ぐにはどうしたらいいでしょうか？

(1) 「人間は不完全な存在」であることと、
(2) 「この世の中は△分業▽から成り立つので、他の職業を尊重し協働し助け合う心がけ、なども義務教育で学ぶべきだと私は思います。

人類が地球を痛めつけずに生存・共存し続けるには (1) 戦争の悲惨さを後世に語り継ぐ、
(2) 無知の知、(3) 人間と社会についての正しい認識が必要だと思えます。

アンドリユー・カーネギーについて

古賀 節子

ゲーニーに移住する。

アンドリユー・カーネギーは、日本でも話題になったことがあるらしいが、私は、鉄鋼王、音楽の殿堂カーネギー・ホールの寄贈者、米国のどんな田舎町のメイン・ストリートに必ず見かける教会、葬儀屋と共にある公共図書館の寄贈者と言う知識しか持っていなかった。

ところが、ある研究会で、現在ハーグにある国際司法裁判所の建物はピース・パレスとして1913年カーネギーの寄贈によって創設された、という事を知って、彼が平和について関心を持っていた事実は新鮮な驚きであると共に、非常に興味を覚えた。

カーネギーは、スコットランドのエディンバラからやや北へ北海に面した漁業と織物業で知られたダンファームリンに、1835年11月25日、手織工の父ウイリアム・カーネギーと母マーガレットの間に生まれた。自伝によれば、ダンファームリンはスコットランドで最も進歩的な

町として知られ、自営のはた織工が多く、政治的緊張がある時には、男達は前掛け姿で国の政治情勢について熱く議論しあうような風土の町だった。そして、カーネギー家は道義心に厚い一族だったと記している。

彼は8歳でランカスタースクールへ通い始め、そして、母方の伯父からスコットランドやイギリスの歴史など、様々教えられた。幼い頃から人を統率したり組織するのが上手で、友達をひきいて修道院を含め至る処で遊んで少年時代を過ごした。

自営のはた織り工の父親は、はた織り機が、産業革命の結果、手動から動力に変わったことに気づかず、悪戦苦闘する中に一家は貧困のどん底へと落ち込み、既に米国へ移住していた母方の伯母を頼りに移住を決意する。1848年、彼が13歳の時、両親・弟と一家四人は、渡航費を借金して大西洋を渡り米国ピッツバーグの近郊、現在はピッツバーグに合併されているアリ

ここでも父親は手織りのダマスク織りを続けたが全く商売にならなかった。彼は、早速、綿織り工場で週1ドル20セントで糸巻きの仕事についた。朝暗いうちから夜遅くまで、13歳の少年にとってはとても辛い仕事だった。しかし、彼の働きぶりが認められ、ピッツバーグで電報配達の仕事につく。そこで独学で電信技術を学び、17歳で、一躍、週24ドルの電信技師になる。その頃、退役軍人が学校へ行けない青少年の為に開いた無料の徒弟図書館の会員になる。彼は当時のことを回想して次ぎのように記している。「僕は読書が好きになった。本を通して総てのことが明かになり、僕は読みふけた。朝6時に起きて夕方6時まで働き続けても読む本があれば僕は満足だった」彼は蔵書1、500冊の小さな図書館が、どれほど想像力と知識を養う養分となり将来の展望を開く基になったか忘れなかった。

米英戦争（1812～1815年）後、西部開拓に邁進していた米国は、更にその勢いを加速し、鉄道の敷設が進んだ。こんな状況の中、彼はペンシルベニア鉄道会社関係者に仕事ぶりを認められ同社へ転職、1859年にはピッツバーグ区間長に就任。1861年南北戦争勃発、ワシントンで軍の鉄道と政府の電信に関わる仕

事に付く。そして、戦後の急激な鉄鋼の需要を見込んで次々と関連会社を設立。実務は有能な人物に任せ、彼自身は、1867年32歳の時、住居をニューヨークへ移し、19世紀クラブの会員になり沢山の知己を得る。

彼は生涯よく旅行し、世界一周の船旅では日本にも立ち寄っている。故郷は勿論度々欧州を訪れ、その歴史から産業・文化・芸術とあらゆる分野の知識を吸収し、得た知識で近代的な工場経営の手法を採用、良質の鉄鋼を安価に製造することに成功、一大鉄鋼会社を造りあげる。丁度その頃、スペンサー、マルクス、エンゲルス等、次々新しい名著が表され、激しい変革の時代だった。彼は英国でもそれら著名人達と交流し、雑誌に記事をかいたり講演をしたり、英国での社会的地位を得る。

1889年、後に「富の福音」のタイトルで欧米に広く頒布されるエッセイを記した。そこで、「金持ちのまま死ぬのは不名誉な死に方だ」と記し、寄贈の原則は個人ではなく、大学・図書館・病院・研究所など、公の益になることにあるとし、資産を教育や芸術などコミュニティの為に費やす意を記した。そして、1890年代には公共図書館建設の一定の方式を決め、約3,000以上の図書館が寄贈された（だから私は同じ外観の図書館を見たのだ）。英語圏の国々にも多くの図書館を寄贈し

ている。

1901年66歳の時、傘下の全企業を、当時世界最大の金融財閥モーガン商会に譲渡し実業界を引退する。その後は、国際平和維持に熱烈な関心を寄せ、国際紛争調停機関創設に全身全霊を尽くした。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、欧州でもアジアでも絶え間なく国家間の紛争が起こり、何千何万の兵士と共に民間の犠牲者も多く、その状況を非常に憂いていた。そんな時、1899年、熱烈な平和主義者のコーネル大学総長A・ホワイト氏から、ハーグに世界中の国々ひいては全人類が恩恵を受ける国際紛争を調停する調停機関と国際法図書館を備えたピース・パレスの創設基金提供の提案を受けた。当初関心は薄かったが、次第に厳しくなる世界情勢を見て、1902年ホワイト氏を自宅に招待し寛いだ時を共に過ごした後、基金提供の決意を伝える。1903年、財団が設けられ、1907年建設地が決定し、1910年タフト大統領と議会の承認を得、協定草案作成委員会が設置された。1913年8月23日の開館式を迎えるまで、ピース・マニアと言われる程、その実現のために全身全霊を尽くした。開館式典には、オランダ女王、ドイツ皇帝、イギリス、イタリア、フランス、オーストリア、ハンガリー、ロシア等、

各国から約400名参加した。館内装飾には各国から特産品が寄贈された。日本は、現在「日本の間」とよばれる会議室の壁一面を覆う西陣のつづれ織りを寄贈した。

今日、ピース・パレスは、国際連合の重要な機関の一つとして国際司法裁判所と国際法図書館を擁する会館として機能している。

わが愛唱歌

さらば恋人よ

イタリア民謡
日本語訳詞…東大音感合唱団

平川 千宏

一 ある朝目覚めて

さらばさらば恋人よ

目覚めて我は見ぬ

攻め入る敵を

二 我をも連れ行け

さらばさらば恋人よ

連れ行けパルチザンよ

やがて死す身を

三 いくさに果てなば

さらばさらば恋人よ

いくさに果てなば

山に埋めてや

四 埋めてや かの山に

さらばさらば恋人よ

埋めてや かの山に

花咲く下（もと）に

五 道行く人びと

さらばさらば恋人よ

道行く人びと

今はカラオケの時代だが、われわれが若いころは歌声喫茶の時代だった。

新宿の「灯」へ友人とよく行ったが、西武新宿駅の方にあとから出来たスペースの広いやお上品な店より、コマ劇場の近くにあった狭い店でアコーディオン奏者を囲んでぎつしりと椅子に座って歌った店の方が好きだったし、今もなつかしい。

「灯」では、ロシヤ民謡や労働歌も歌ったが、私が好きな歌は『兵隊が戦争に行くとき』や『さらば恋人よ』だった。前者はイヴ・モンタンなどが歌ったシャンソン、後者はイタリアパルチザンの歌である。二曲の歌詞を続けてあげる。

兵隊が戦争に行くとき

作詞・作曲…フランシス・ルマルク

唄…フランシス・ルマルク、イヴ・モンタン

日本語訳詞…穂高五郎

その花めでん

『兵隊が戦争に行くとき』は、第二次大戦の時の歌だとすると、フランスはナチス・ドイツと戦っていたはずなので、それが反戦歌ではおかしいのではないかと思ったが、これはそのあとのフランスのインドシナ戦争の時の歌であり、その反戦歌だった。

『さらば恋人よ』は、真正正銘ムッソリーニのファシズムに対する戦いの歌である。

両方とも、恋人と別れて戦争に行くという点で、共通している。

民謡では、明るく哀愁をおびたアメリカ民謡が好きである。

なかでも、『峠のわが家』が好きである。それも、よく歌われる

空は青く緑の野辺
なつかしのわが窓

で始まる歌詞ではなく、

山なみに雪はあれど
春の光さして

うららかに花の咲けば
胸の痛みましぬ

という歌詞の方が好きである。

フォスターの歌では、有名な『オールド・ブラック・ジョー』や『なつかしきケンタッキーの我が家』よりも、小品といえる『老犬トレイ』がいい。

日本の歌では、どうだろうか。

歌謡曲の類では、どちらかといえば『見上げてごらん夜の星を』とか、『喝采』とかのように、朗々と歌われる歌が好きだ。他には、『夏の思い出』や『ちいさい秋みつけた』（両方とも中田喜直作曲）など。

民謡では、のびやかな『小諸馬子唄』や『南部牛追い唄』もいいが、一番好きなのは『新相馬節』だ。

新相馬節

福島県民謡
補作詞…小野金次郎
編曲…小沢直与志

ハアー はるか彼方は 相馬の空かヨ

ナンダコロヨート

（ハアー チョーイチョイ）

相馬恋しや 懐かしや

ナンダコロヨート

（ハアー チョーイチョイ）

この歌は戦前からある歌だが、周知のように福島県の相馬地方は、東日本大震災の時の津波、さらに福島第一原発の事故によって大きな被害を受け、今なお多くの人たちが他の地域で避難生活を送っている。その人たちは、今この歌をどのような思いで聞いたり、歌ったりするのだろうか。聞くことは出来ても、歌うことは出来ないかもしれない。

コロナ禍の大学で令和二年度の遠隔講義と学会等講演はいかにして遂行されたのか？

―極私的覚え書き（途中経過報告）―

水谷 長志

二〇二〇年の年が明けて間もなく、東京湾の屋形船、横浜港の大型クルーズ船に始まるコロナ禍に対し、対岸の火事ぐらいの認識しかもっていなかった私と子どもたちに対し、コロナの怖さに強く反応し、感染忌避の念を即刻に示したのは、数えて卒寿を迎える母だった。

孫たちが祖母の卒寿のお祝いと重ねて、遅ればせの私の還暦と退職の慰労を兼ねて企画した箱根への一泊の招待旅行にも、母はいち早く参加を見送ったのが二月の半ばの週末だった。その週明けから、私の、有明出港のフェリーに乗り、徳島港から四国に入り、さらに別府港への船を乗り継いで、車を駆って長崎の友人を見舞って、帰路は博多から下関へ山陽道を経て、瀬戸大橋から再び徳島に戻り、またフェリーで帰るといふ春休みの計画は、フェリー会社の方針でのコロナ予防策の徹底を前に、大きく変更

することになった。帰りのフェリーはキャンセルして、長崎から京都での一泊を挟んで、ひたすら東海道を走り抜け、その帰る途中の、カラジオから流れる情報が私にとってのコロナ禍の始まりだった。

3月に入ると早々に教授会も対面からネットワークを通じてのオンライン会議に移行し、その習熟もままならないうちに卒業式、謝恩会の中止が決まって、さらには入学式も新入生オリエンテーションもないままに、多くの大学同様、本務校においても出講先の複数の大学においても、五月連休明けを別途として、完全遠隔講義の春学期に突入していった。

大学はすでに学内外においてインター／イントラ双方のネットワークをその教学の基盤に置いているし、教員のシラバスから出欠把握に成績管理などにわたって、全面的にL M

Sと呼ばれる学習管理システム（Learning Management System）が導入されている。そのLMSも図書館のシステム同様、大学によってそれぞれにベンダー開発のパッケージを導入しているし、ところによっては独自開発もあるように、一律ではない。通常の日常においては、必要最低限の機能は使っても、教学の業務がLMSに決定的にデイベンドしているわけではなかったし、何かあれば学生に対しても教職員間でも、対面での直接の連絡とトラブル回避の措置が可能であつたので、LMS自体の利便性の検証なども緩かったと言わざるを得ない。だが今回は、LMSはもちろんのこと、講義自体が対面ではなく遠隔（リモート）講義の一辺倒になつてしまつたのだから、オンライン・ネットワークがまさにライフラインとなつたのである。少なくとも二〇二〇年度春学期においては、ごく一部の演習や実習の科目を除けば、多くは遠隔となつた。萩生田文科大臣は、「大学もオンラインと対面併用を」と述べたが（8月4日）、現場からの疑問感は大い。

遠隔講義のスタイルは一般的には、次のように類別される。

ネットワーク環境は、教員は自宅もしくは大学研究室から、多くの場合、自宅Wi-Fiおよび研究室では有線LANからPCでインターネット接続。受講学生は自宅のWi-FiからP

Cもしくはスマートフォンで、もしくは4Gとスマホの接続環境などが前提となっていた。受講生のネット接続の脆弱性は、当初からの懸念事項の筆頭にあるものである。

講義形態Ⅰ…LMSによるPDF等紙に代わる教授資料の提供と課題回収による（音声や動画を含まず）↓利用システム⇨LMSに終始する。講義形態Ⅱ…リアルタイムの疑似対面講義↓Zoom等のWebオンライン会議・講義システム。

講義形態Ⅲ…通常対面講義での資料投影（主流はパワーポイント、以下PPT）に音声を付与して音声付き動画ファイルを作成してファイル共有を図る、謂ゆるオンデマンド型↓動画ファイルの共有環境をYouTubeに実現するケースが多いが、単なるクラウド型のファイル共有に閉じるケースもある。

講義形態Ⅳ…右のⅠ～Ⅲの併用型。

ちなみに筆者は、LMS（資料提供と課題回収）+MS社製のZoom類似機能実装システム+YouTube利用による動画オンデマンドを前提にして、LMS障害時対応のために、つまりはLMSが落ちても講義が可能なように、Googleサイトによる簡易な個人揭示ホームページを用意して維持した。

都内大手私立大学としては早期の5月1日（金）に遠隔講義を開始した青山学院大学は（筆

者もその開始週の最終日に初の遠隔講義を行う予定であった）、開始早々にLMSに利用が集中して、週明けしばらくまではLMSが障害して、先行きの不安を一層募らせた。

青学の私の出講は5月7日に始まり、きつちりと全講義回数の終了する8月13日まで、本務校の跡見では若干の講義回数を減らして、7月末までには予定の講義および課題提出を終わらせている。

対面の通常講義では、前年度提出のシラバスに基づいて、配布資料の作成と講義のPPTほか動画ファイルなどの参考資料の準備をもって講義に臨むスタイルであるが、今期にあつては：

手順1. PPTを作成。

手順2. 手順1のPPTに解説の音声を付与。

手順3. 手順2のPPTをMP4（音声・動画ファイル）に変換。

手順4. 手順3のMP4をYouTubeに掲載。

手順5. 手順1のPPTをPDFに変換・作成。

手順6. 手順5のPDFをクラウド型ファイル共有へ掲出。

手順7. Googleサイトへ手順4のアクセスURLと手順5のファイルへのリンクを形成。

手順8. 跡見・青学ともに、それぞれのLMS

Sへ講義内容、PDF、YouTubeの案内指示および各回のミニ課題（出欠管理を兼ねる）等の掲出を可能な限り、講義前々日中に完了する（目標）。

以上の手順が講義前の仕込みである。過度に軽微でも重厚でもなく、いたって平均的な、今回のコロナ禍にあつての遠隔講義を担う大学教員の講義準備のステップではないかと推察される。Face bookにおいては、早々に「新型コロナウイルス休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」が立てられ、本稿を書いている8月初旬の時点でグループメンバーは2万人を越えている。このグループでの様子を見る限り、さらに多くのIT技術を駆使して、プロの？チューバーかと思うほどのテクニクの披露もあるが、4～8月の間の私のリモート講義の精一杯は、以上の手順に尽きるし、いまは講義の後始末である採点から受講者評をよくよく把握分析する大きな仕事が残っている。あわせて来月の9月初頭の名古屋の私大での集中講義と秋学期の学習院大学と本務校での、やはり遠隔講義の再開に備える必要がある。

筆者の場合、実際の講義の進行は…

[1] リアルタイムのオンライン疑似対面講義を冒頭の10～20分に始める。

[2] 受講生によるYouTubeのMP4

ファイルの視聴、最大50分ほど、平均して40分前後。

[3] 再びリアルタイムの疑似対面講義に戻り、補足、参考動画の上映、質疑応答、課題解説から次の予告など。

通常の対面講義に比べて、新手に必要となった講義準備の中核は、やはりオンデマンド型にして、音声付PPTをYouTubeへ上げるという作業で、平均して1講義3〜4時間程度にあった。定められた授業時間に固定化されず、縛られずに、中核となる講義内容を反復して、視聴できることは、受講生にもメリットとして評価されているように見受けられる。

Zoomなどによるリアルタイム講義

←

オンデマンドの動画視聴（主たる講義）

←

Zoomなどによるリアルタイム講義

という進行を秋学期にも踏襲するつもりである。

7月4日に、「継承の困難」とMLA連携―その両者を繋げて、学部学生の調査研究力の底上げを狙うことの試み―と題し、情報知識学会第19回年次研究大会の基調講演を行い、その4日後、9月に集中講義を控えている南山大学で、令和2年度第1回司書課程・学校図書館司書教諭課程講演会において、「継承の困難」と

MLA連携―MLAのamalgamに遡り、近代の超克としての「綜合の回復」を目指すことの試み」の二つの招待講演なんとかこなすことができたのは、当日の会議ソフトが、ともに一番の流行で一般的となったZoomであっても、ちなみに青学はCISCO社製のWebex、跡見はMS社のTeamsというように、ソフトに違いがあったとしても、遠隔で聴衆の顔が見えなくても、なんとか乗り越えることができたのは、5月7日以来、遠隔講義において、その場数を重ねてきたことの賜物であらう、と感謝している。

以上、令和2年度上半期の大学での講義や講演の顛末を書いたものの、まだまだ当分は、さらに試行錯誤を重ねていかねばならないに違いない。ITの技術もさることながら…

① 受講学生の負担と得られるものとの天秤をあらためてより正確に測ること。

② 伝達する知識や情報の量よりも、図書館と情報と資料についてよりエッセンシャルな事項を整理して提示すること。

③ リアルな図書館への希望と憧憬を途切れさせず一層膨らませるイメージの喚起力を持つ素材の探索に話し手自身、すなわち私が務めること。

このような3点を秋学期へ向けての課題と

し、そして、なによりもコロナ禍が去って後に、リアルな図書館、特に大学図書館に足を踏み入れたとき（なんとと言っても今年の新人一年生はまだまだ自分の大学の図書館の扉を一度も開いたことのない学生が圧倒的に大多数なのだから）、戸惑うことなく、既視感^{デジャヴ}をもって、あらたな図書館の世界を開いていつてもいいと切に願うのである。

駅名考―効率性・経済と文化―

山崎 久道

関西の大手私鉄である阪急電車と阪神電車が、「梅田」という駅名を、昨年10月から「大阪梅田」に改称した。外国人や関西以外の人に分かりにくいから、というのが、改名の主な理由だそうだ。そのニュースを聞いたとき、正直、なんとアホらしいことか、と思った。梅田というのは、伝統的な地名で、由緒正しい駅名だ。それに大阪という冠称を安易につけると

いうことは、地名の持つ文化的意義を抹殺するものだ。梅田といえば、それだけで、もう大阪なのである。同様に、「河原町」を「京都河原町」、「三宮」を「神戸三宮」としたのも、同工異曲である。かと思ったら、阪神電車の延伸で近鉄と相互乗り入れが実現した「難波」は、「大阪難波」となった。これで、キタの梅田とミナミの難波が、いずれも変な名称の駅になってしまった。ある大阪人は、「『大阪大阪』という駅名ですね」と自嘲していた。

鉄道紀行文で一世を風靡した宮脇俊三氏が、

駅名変更について、慨嘆していたのを思い出す。氏が挙げたのは、「毛馬内」を「十和田南」、「杓掛」を「中軽井沢」、「坊中」を「阿蘇」と変更する観光目的の改称であった。「大阪」「京都」などを頭につけるのも、確かに観光目的とも言えよう。それと同時に、この国では、駅名など、経済的な都合でいつでも、いかようにも変えられると思われているのかもしれない。

英国の首都であるロンドンに行った時、鉄道のターミナル駅が、方面別に分かれて独立していることに驚いた。国際列車ユーロスターの発着するのは、「セントパンクラス」駅、バーミンガム方面は「ユーストン」駅、オックスフォード方面は、「パディントン」駅といった具合である。

翻って、わが日本の首都である東京では、JRのほとんどの長距離列車は、東京発着で、一部が上野、新宿、品川などから出ている。品川発は、東京発の延長と考えられるから、ほとん

ど東京駅発といってよい。かつて、東北・上信越・常磐方面は上野、房総本面は両国と大きく分かれていたのに、今や、ターミナルとしての両国駅の使命は終了し、上野駅の存在感も希薄になってしまった。一大ターミナルだからこそ、「あ、上野駅」という演歌になるのである。

さて、ロンドンで、ヨーク方面の列車が発着するのは、「キングスクロス」だが、この駅は、「セントパンクラス」駅の隣にある。日本流に考えると、どうして、同じ駅にしないの不思議だ。日本には、その反対の例もある。わが東京駅を見ると、ほとんど一駅分は離れている京葉線のターミナルも「東京」駅である。同じ東京駅だからと乗り換えようとすると、私の足では、たっぷり15分は歩いてヘトヘトになることになる。いつそのこと本体の東京駅は「丸の内」、京葉線の駅は「丸の内三丁目」あるいは「馬場先門」としたらよいかもしれない。もっとも、これは「東京」という駅名が消えることになるので、実現は難しいだろう。さらに、丸の内を拠点とする旧財閥と、日本橋を擁する旧財閥との間の争いになって、決着がつかないことも予想される。その代理戦争でもあるまいが、東京メトロの「日本橋」駅が古くからある一方、同じ東京メトロの「二重橋前」駅に、いつの間にか「丸の内」と付記されるようになった。

東京の地下鉄を見ても、「赤坂見附」と「永

田町」は、別の駅だから、乗り換えに時間がかかって許せるが、「蔵前」のように地上の道路を歩いて乗り換えるのに、同じ駅名というのはいただけでない。その点「御徒町」(JR)、「上野御徒町」(都営地下鉄)、「上野広小路」(東京メトロ)と分かれているのは、まことに結構である。「新富町」(東京メトロ有楽町線)と「築地」(東京メトロ日比谷線)が乗り換えできる近さなのには、最近、気がついた。どちらも残して欲しい駅名だ。(この二駅は、実際に、乗換駅になっている。)

来日する外国人は、日本の鉄道は、分かりにくいと言っているが、冗談も休み休み言ってみよう。あなたの国の鉄道が、どれくらい外国人に優しいのか。だいたい、日本では、駅名が日本語の漢字、ひらがな、ローマ字(ほとんどがヘボン式)、中国語、ハンガルの4通りで表記されている。こんな国は見たことがない。

かつて、オーストリアの地方駅で列車を待っていたら、ちがう鉄道会社の列車が入線してきて、乗れないでがっかりしたことがあった。ベルギーのアトでは、一等車が一番前に連結されていて、停車したと思ったら、車掌が「ヴォアラ!」と叫んでいる。大学時代に習ってかろうじて覚えていたフランス語で、それが、「あっち」という意味だと分かり、必死に先頭車まで、ホームを走って何とか乗車できた。

フィンランドでは、特急は止まるが、ローカル列車は止まらないという駅があって、乗り換え駅の選定で混乱し、危うく特急列車に乗りそこなうところだった。このときは、ばやばやしている私たちに、乗客が一斉に大声で教えてくれて、事なきを得た。また、イギリスの地方駅では、一等車が停車したところには、ホームがなく、後方にある一等車から何両か前まで事前行っていきないうと降りそこなう。しかも、列車の扉のガラス窓を手で下ろして、外側にあるレバーを自分で操作しないと、扉が開かない。こんなことは、ガイドブックを詳細に読んでいれば、分かったかもしれないが、日本の鉄道に慣れた「外国人」には、決して優しくない。

ホームといえば、ロンドンからバーミンガムに行くとき、列車の入線ホームがなかなか表示されず、発車時間が近くなつて、やっと表示され、何人かの乗客と一緒に指定されたホームまで、地下道を走ったこともある。なんで、始発駅で、時間もたつぷりあるように行つたのに、走らなくてはならないのか。こんなことは、日本では、ほとんど考えられない。ただ、ヨーロッパは国内でも鉄道が発達しており、国境を超えての鉄道での移動も簡単(新型コロナウイルス感染症が蔓延する前のことである)なことは、EU結成の恩恵で、実に楽しい鉄道旅行ができる。

鉄道も駅名も、近代化の象徴であるとともに、

文化の片鱗でもある。とくに駅名には、その土地固有の歴史や文化が表れている。わが国の駅名を見ていると、効率や経済が文化に優先する国柄が見て取れる。そもそも、駅名を、鉄道利用のための便宜的な記号だと考えている人々も多いだろうが、一方では、駅名は、その土地の歴史や文化を表現する薫り高い「ことば」なのでもある。

効率性や経済の観点のみから駅名を扱うことは、歴史や文化に対する冒とくではないのか。駅名の統一の過程を見ると、この国で多様性を認める動きが鈍いのもうなずける。均一性を実現することが、即「便利」「効率的」であるという認識がごくごく一般的なのであろう。そういう私は、もし改名されて、「東京新宿」「東京渋谷」「東京品川」などという駅ができれば、そこでは乗りたくも降りたくもない。

編集後記

「ふぉーらむ」17号をお送りします。

2020年春からのコロナ禍により、1年遅れとなりましたが、ようやく年内に発行することができました。

いまだコロナ禍は沈静化する目途が立ちませんが、今年度は中止したサポートフォーラム賞の表彰活動も含め、来年から徐々に活動を再開していければと考えています。

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

(岩本 / 森本)

ふぉーらむ 第17号

2021年12月20日発行

発行人 山崎久道
製作 森本浩介／岩本謙一／尾崎みやま／赤田麻衣子
発行所 図書館サポートフォーラム
〒140-0013 東京都品川区南大井 6-16-16
日外アソシエーツ(株)内
TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845
http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html